

## 図書 紹介

史上最悪のウイルス 上・下

そいつは、中国奥地から世界に広がる

著者：カール・タロウ・グリーンフェルド／訳者：山田耕介

発行：(株)文藝春秋／〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町 3-23／TEL03-3265-1211  
／B 6判／252頁（上）・232頁（下）／上下共価格 1800円（税別）／2007年1月15日発行

本書は2005年春、出版された「China Syndrome」の訳本である。2002年から2003年かけて広東省の住民をパニックに陥れた新型肺炎、重症急性呼吸器症候群「SARS」は同年2月に香港に飛び火し、急速に東南アジア、北米に広がった。病原体は不明で、抗生物質は効かず、有効な治療法もなく、医療関係者も次々に院内感染した。空気伝染ではないかと恐れられ、いっどこで出くわすかわからないという不安さは今も記憶に新しい。幸いわが国では感染患者は出なかったが、保菌者の台湾医師が入国したことがわかり、大騒ぎとなった。SARSは、発生から8ヶ月ほどで収束したものの、WHOの調べで、被害は香港、マカオ、台湾のほか26カ国におよび感染者8400余人、死者876人に達した。

本書は、香港に拠点を置く「タイム」アジア判の編集長である著者がSARS禍の渦中から自らの体験を交え、21世紀初のエマージング伝染病の8ヶ月とその後の発生源の追求など描いたノンフィクションである（「訳者あとがき」より）。内容は、「ウイルスにかかわる問いは4つかいない」（香港大学 管 軾）を次の第1～第4部のタイトルに用いて、2002年11月1日から2004年1月1日の出来事を時系列（1～73）に分けて追跡している。

第1部 それはなにか？ 2002年11月1日～2003年1月1日 1～8（上巻）

第2部 それはなにををするのか？ 2003年1月3日～2003年2月17日 9～23（上巻）

第3部 それはどこからくるのか？ 2003年2月21日～2003年4月3日 24～38（上巻）

それはどこからくるのか？ 2003年2月21日～2003年4月3日 39～54（下巻）

第4部 それをどうころすのか？ 2003年4月18日～2004年1月1日 55～73（下巻）

ゲテモノ食いで知られる広東のグルメ文化を裏で支える出稼ぎ労働者、スラム街で暮らすかれらの呼吸器を襲ったSARSの生き地獄、感染の危険を知らされないままSARSウイルスに身をさらす救急病院の医師たち、一人娘をSARSに奪われた香港の団地夫婦、SARS病原体の分離競争に火花を散らす各国のラボ、病原体の保菌動物の発見に執念を燃やすウイルス学者、SARS封じ込め作戦で犠牲者まで出したWHOの活動などが順次紹介されている。

さらに著者ノート、訳者あとがき及び情報源と補足のためのノートは、膨大な量の情報がさまざまな登場人物、その遺族とのインタビューで収集されたものであり、そのほかの情報源や出版物から得た引用やデータ、具体的な記述は、文中か巻末に出典が明らかにされており、わかりやすい解説となっている。

中国で最後の SARS 患者が報告されてから 3 年近く経過した。その後、鳥インフルエンザがパンデミックの候補として浮上してきた。鳥インフルエンザが人間にジャンプした場合、死亡率は 33%にも達する。2003 年以降、ニワトリの鳥インフルエンザ感染が報告された地理的範囲は着実に拡大し、カンボジア、インドネシア、ルーマニア、ロシア、タイ、トルコ、ベトナムの諸国にまたがり、2005 年 11 月の時点で死者 100 人を超え、そのほとんどすべての人が病鳥との濃厚な接触が原因であることがわかってきた。

パンデミックに対する地球規模の予防の成否は、感染の危険がある国々の協力と公開性にかかっている。中国では鳥インフルエンザの存在を公式に否定していたが、SARS 隠ぺいを国際社会に暴露されて数十億のニワトリに抗インフルエンザ・ワクチンの接種などの予防措置を実施して一時的な公開性に踏み切ったが、その後の透明性の欠如は相変わらずで、その原因は中国の体制自体にあるという。

本書は、上・下 2 巻で少々長いですが、推理小説のように手軽に読み進めることができる。SARS や鳥インフルエンザ、これらの中国の対応に関心のある諸氏には是非一読をお進めしたい。

(学会事務局)

